化州（Hóa Châu）城の考古学調査

西村昌也，レ・ディン・フック，レ・ズイ・ソン，グエン・ヴァン・クアン

Archaeological Research at Hóa Châu Citadel

NISHIMURA Masanari, LÊ Định Phúc, LÊ Duy Sơn, NGUYỄN Văn Quảng

Thưa Thiên Huế 省 Quảng Điền 県 Quảng Thành 社の化州（Hóa Châu）城は、外墨と内墨の２柔構造を基本とする城郭遺跡で、外墨の周囲長5000m 前後の規模をもつ。

城郭は８－９世紀ごろに盛り土による嵩上げと土墨造成により行われ、その後、陳朝期に内墨や周辺で、盛り土による嵩上げ、建築などの建設活動も行われている。また現集落下での居住活動が活発になるのは17-18世紀以降と思われる。

キーワード：化州（Hóa Châu）城、チャンパ、大越、城郭（内墨と外墨）

１．はじめに

北属時代、そして10世紀の独立を経て、黎朝初期に至るまでの北部ベトナムの政権（中国の支配政権や大越）が、中部ベトナムを自領土化するにあたって、先住者チャム人との幾たびかの抗争を繰り広げた主舞台が、現クアンビン、クアンチ、トゥアティエンフエ各省（筆者は中部ベトナム北域と呼ぶ）である[1)]。

もともとチャンパの支配領域に属していた当地域は、当時の遺跡や遺物を多く残している。フエとその周辺における塔遺跡としては、潟湖の海岸側半島部の砂丘に埋もれていたMỹ Khánh（ミーカイン）塔遺跡（Phú Vàng（フーヴァン）県Phú Diên（フージエン）社Mỹ Khánh（ミーカイン）村：図１）などが有名であるし、当調査報告で主たる調査域としたHương Vinh（フオンヴィン）社のディアリン関帝廟近くにおいても、塔建築の頂部を装飾する石製建築装飾（図２）が出土している。

しかし、チャンパと大越の抗争史において、両勢力が最も重要な拠点とみなしたところは、城郭であろう。チャンパの城郭に関してはクアンナム省のチャーキウ城やクアンガイ省のコールイ城など幾つか

1）西村昌也「ベトナム形成史における“南”からの視点：考古学・古代学からみた中部ベトナム（チャンパ）と北部南域（タインホア・ゲアン地方）の役割」『周縁の文化交渉学シリーズ６　周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓流」』関西大学文化交渉学教育研究拠点（印刷中）

図１　砂丘に埋もれていたMỹ Khánhのチャンパ塔遺跡

図２　ディアリン発見のチャンパの塔尖頂部

で考古学調査が進行中である。ただ、それらは紀元1000年紀前半のものであり、紀元1000年紀後半のチャンパやその後の大越との交渉史を理解するために中心となる遺跡ではない。本調査の主域フオンヴィン社の北域に控えるQuảng Thành（クアンタイン）社には、文献史が言及するところの化州城（Thành Hóa Châu（タイン・ホアチャウ））が位置しており、大越とチャンパの交渉史において主舞台の一つと考えられているところである。当城郭遺跡に関しては、1997年に考古学院によって発掘調査が行われているが、その調査内容は一部公表されているものの、関係者以外がきちんと理解できるものとはなっていない。また、当城郭遺跡は、その形態や推定される造営時期などから造営主は大越ではなくチャンパであることは確かなのに、チャンパの城郭遺跡に加えられていない場合もある。それも、考古学調査による認識を明らかにしていないことによると思われる。フオンヴィン社での野外調査を始めるにあたって、筆者はフエ都城北郊域を時間軸に沿った立体的な歴史地理学的理解を深めてみたいと思った。それが当地域の“地域研究“において最初になされるべきことと考えたからである。またベトナム史の文献資料が扱うのを不得手とする17-18世紀以前の歴史や文化理解には、考古学を活用するのが正当手段であるという認識を、共同調査のベトナム側代表、（フエ科学大学歴史学部）と共有していた。そこで、歴史学部考古学コースとの共同調査体制で2009年から2011年に亘って、３度の試掘規模での発掘調査、遺跡と周囲の踏査と測量調査を行った。2011年度の調査に関しては、調査を終えたばかりで出土遺物の整理も行っておらず、遺跡全体の測量調査も完遂しているわけではないので、やや不完全な形での成果公表になるが、少なくともこれまでのホアチャウ城に関する曖昧な認識[2]を改めるには大いに役立つものとして考え、これまでの調査成果を簡単に報告する。

また、本調査においては、クアンタイン社人民委員会のご支援と、郷土の史跡や歴史の理解や調査に情熱を注いでやまないĐào Lý氏（クアンタイン社人民会議主席）の積極的な参加とご支援があったことを特に記しておきたい。

2）Lê Đình Phụng（1998）Thành Hóa Châu trong lịch sử, *Thông Tin Khoa Học và Công Nghệ*, số 1, Sở Khoa học, Công nghệ và Môi trường Thừa Thiên Huế, tr. 62-67.
Hoàng Bảo và Lê Chí Xuân Minh 2002 Thành cổ Hoá Châu. *Nghiên cưu Huế* tập 4: 83-93.

図３　Hóa Châu 城全景（衛星写真 Quickbird 画像2002年７月撮影）

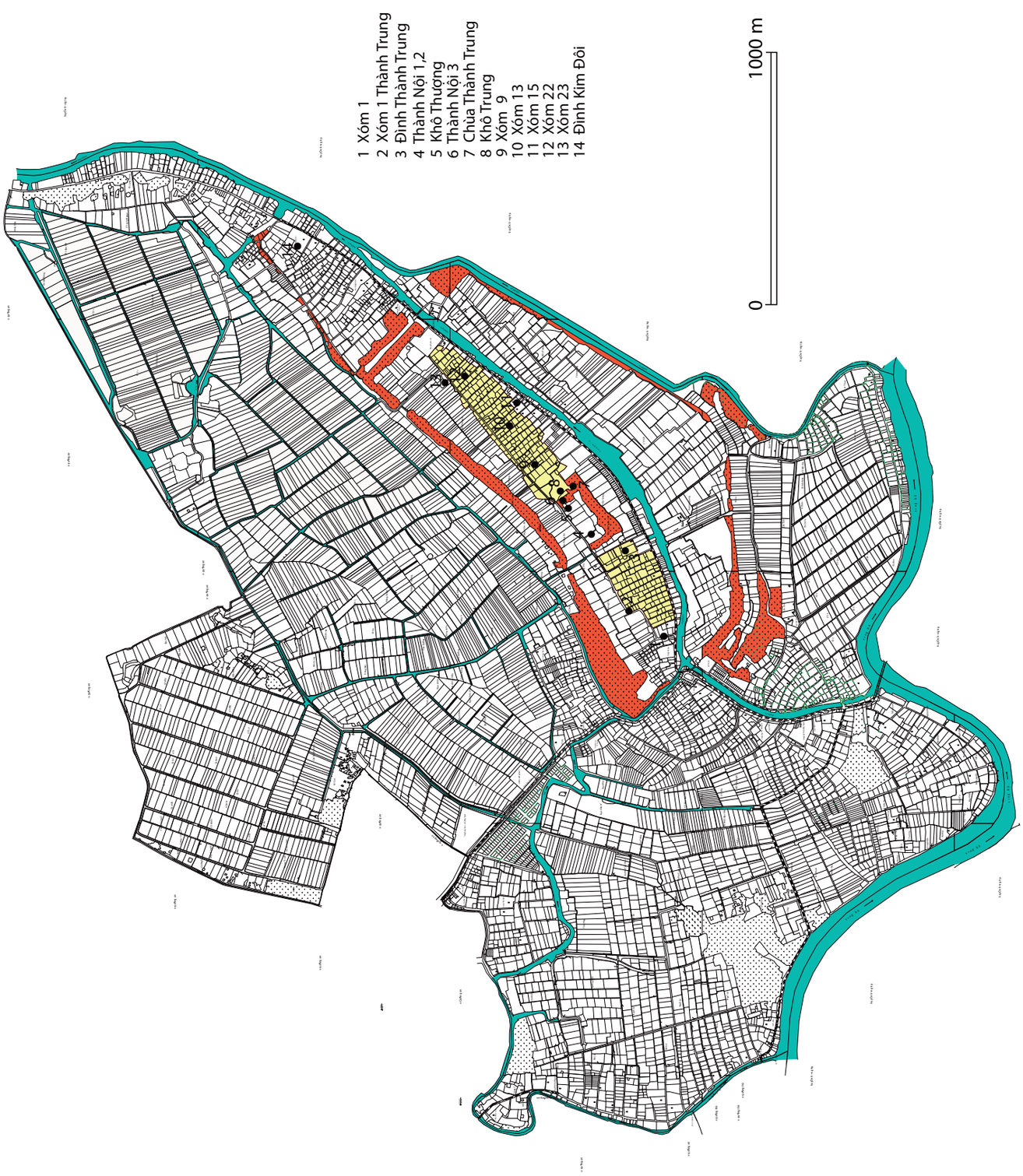

図４　地籍図より起こしたホアチャウ城土塁域（赤塗りは土塁分布域）

図５　ホアチャウ城城郭内を流れる運河

図６　Phú Lươngのチャンパ碑文

図７　Phú Lươngの石碑後ろにある礎石

図８　外墨北西墨隅部近くにて

２．立地と遺跡構造

ホアチャウ城は、フオン川とタインフオックで合流するBồ（ボー）川の支流であり、タムザン潟湖に注ぐKim Đôi（キムドイ）川とThành Trung（タインチュン）川の左岸域に立地している（図３、図４、フオン河流域での位置は口絵１参照）。城郭の長軸は北東－南西を結ぶ方向に沿っており、その北東端から潟湖までは２km強しかない。城郭は、外墨と内墨の二重土墨をもち、キムドイ川は外墨の南外縁をなぞるように流れている。またキムドイ川に並行して、外郭の中心主軸を貫くようにタインチュン川が流れている。この川幅は60m強で一定しているようにみられる。また、城郭内での流路（図５）はかなり直線状であるため、人工的に掘削した運河である可能性が高いと考えている。

クアンタイン社のPhú Lương村には、10世紀前半の刻文内容をもつチャンパ碑文（図６）も現存し、その後方には、おそらく時期的にも近いチャンパ代の礎石（図７）が位置している。

それぞれの土墨の規模と構造について報告する。サイズは、トータルステーションを利用しながら測量中であるが、一部未完であるため、調査者の実測値を報告できない。今回は入手した2000分の１地籍図上（図４の原図）で計算した数値を概略規模を理解するのに問題ないものとして報告する。

外墨は、幾つかの長い土墨から構成されている。北西中央墨が900m弱長を計り、内墨の長軸に並行するように造営されている。北西中央墨の南端部の玦入部を超えると、L字形の北西墨となり、その北西部は長さ約640mを計り（図８）、南西部は約250mを計る。また、その外側に並行して走るもう一つの土墨があり、さらに外側は水濠（図９）が廻らされている。タインチュン川を南渡すると、外墨の南西墨

図９　外墨西北隅を廻る濠

図10　外墨北端墨東北隅部

が、950mの長さで西から東にかけて、湾曲部を経て比較的直線状に走っている。南西部の外側には、さらに短長二重の土墨が設けられている。南西部土墨東端と南東部土墨西端の間には玦入部があり、その外側には約320m長強の盛り土部があり、これも玦入部を防衛する土墨である可能性が高い。南東部土墨は、L字形になっており、南東側の土墨最長部は約1150m長を計り、北東側の土墨は長さ230m強を計る。北東側土墨の外側にも土墨が設けられている。そして外墨北端墨もL字形を呈し（図10）、長さは、土墨の北東部が340m、北西部が180m弱を計る。外墨は、概して湾曲部などが二重、三重に土墨をめぐらされており、土墨幅は、南側の方が幅狭である傾向が強い。

外墨は、玦入部を除き、土墨部のみで全周5000m近い規模となり、玦入部を含めれば周囲長5000mを超えるのは確実である。

内墨は、全周770mの不均一な長方形で、北西墨が240m前後、南西墨が145m前後、南東墨が250m前後、北東墨が135m前後となる。ただし北東墨は、これまで土墨として認識されていなかった部分であるが、今回のKTR試掘調査により土墨構成層が下位にあると推測されたので、北東墨域として認定した。内墨の幅は南東墨が最も幅広で、最小でも40m幅はある。南西墨も比較的幅広で30m前後ある。北西墨は、現在集落間の移動用の小道が走り残存幅も大きくはない。

内墨内の平坦面は、内墨外の周囲平坦面（図４黄色部）より２－３ｍ程度高いのみで、特別に高く造成しているという印象は受けない。内墨に北接する平坦面は、東北方向に外墨の東北墨近くまで延び、西北側や東南側の水田面より高度が高く、タインチュン村の民家が整然と分布している。

内墨の南西墨の外側には、土墨に並行して標高の低い水田が分布しており、過去に水濠が廻らされていた痕跡と考えている。

外墨の東北第２墨の外側に、並行してもう１つの幅広の土墨が走っている。さらに東北域には現在のKim（キム） Đôi（ドイ）村の集落が分布する区域の東北側と西北側に、やや途切れ途切れで、なおかつ外墨より幅や高さがより小規模の土墨が存在することが踏査により判明した。この土墨群を北墨と呼称しておく。北墨も不整な長方形を分布範囲としており、もっとも幅広かつ堅牢に造成されている南西墨は長さ約320m、北西墨は断続的に続き660m弱長を計る。そして、北東辺と南東辺には現在対応する土墨は確認されていないが、それぞれの長さが125m、640m弱を計る。

3．文献史資料より

『大越史記全書』には、陳朝から黎朝初期（1470-1471年の黎聖宗によるチャンパ親征以前）にかけて、ベトナムとチャンパの間の化州などの国境地域をめぐる激しい攻防が記されている。ここでは、化州城あるいは化州に関係する歴史事象を挙出しておく。なお、李陳朝とチャンパの関係史は、桃木至朗（2011年）『中世大越国家の成立と変容』に詳しい。

1306年、陳朝は、玄珍公主を占城王制旻（びん）に嫁がせ、代わりに1307年烏州、里州の２州の割譲を受け、それぞれ順州、化州に改名する[3)]。

1308年、玄珍公主が占城より北に戻るので、上皇が化州寨主に命じて、船と占人300人で送らせる。

1362年、占城が化州を侵略したので、杜子平が臨平、順化の軍を率いて平定し、さらに化州城の修築を完成する。

1365年、占城人が化州の春遊の民を侵略する。

1368年、占城が牧婆摩を派遣して、国境を化州以北に要求し、その後陳世興らを派し占城を討たせるが、逆に敗北する。

1372年化州人胡隆を化州の知州とする。

1376年占城が化州を侵略し、清化、乂安、演州の軍民を動員して、５万石の糧穀を化州に運ばせる。

1391年胡季釐が軍を指揮して、化州に行き、城池を修造する。

1407年、占城が、明の安南占領に乗じ、升華を奪回し、化州を冠する。

1408年、明侵略軍の張輔が演州に侵攻し、陳頎（後陳朝の簡定帝）が南行して化州に入る。

1411年、國娣長公主を化州人胡貝に嫁がせ、司徒として清化に出撃を命じる。

1413年、張輔の乂安侵攻をうけて、陳李拡（重光帝）は、化州に逃げるが、張輔は水軍を発して、21日で化州に到り、順化州城を攻める。陳李拡はラオスに逃げるが、張輔に捉えられ、順化人は降伏する。

1434年、占城が化州人から掠奪を行うので、黎列に命じて乂安、新平、順化の諸軍に命じて、新平、順化の巡哨を行わせ、占城の賊が辺境で掠奪を行った際の撃退を命じる。

1444年、占城主、賁該が化州城侵攻し人民を掠奪したため、黎盃、黎可らに10万の兵を預け、攻撃させる。

1445年、占城が化州安容城に入冠するが、洪水に遭い失敗する。

1469年、占城人が船で来航して、化州を侵略する。

1470年占城国王槃羅茶全が、水兵、歩兵、象馬の大軍を指揮し化州に侵略し、化州の守将范文顯らは戦うも適わず、占城軍が入城し、黎聖宗が親征を決定する。

3）因みにこの時、玄珍公主がチャンパに嫁下するにあたって、フエ域を発してチャンパ（ハイヴァン峠以南）に向かった道が陸路であるという仮定に基づいて、Đường Huyền Chân Công Chúa（玄珍公主の道）なるものが、フエ市の西郊外にあるチャンパ城郭址、ロイ城から南に走る道路に名付けられている。しかし、これは1975年以前の旧政権時代の誤った認識による命名であり、本来ならば、ホアチャウ城からの道にĐường Huyền Chân Công Chúaの名を付けなければならないとするダオ・リー氏の意見は的を得ている。

この他、以下のような文献資料が化州城について記録を残している。

『烏州近録』巻４城市では、「“化城” 城中に小河川が通じ、川の右岸には肇豊府学都承衛門があり、金茶大江は、その南に流れている。地形の凹凸で、湖沼を抱え、約千万頃の広さがあり、四周を水に囲まれ、城塁の高さは100雉もあり、長い雲のようだ。その地形は天然の峻険である。陳祐宗の大治５（1362）年、杜子平が臨平、順化の軍を率いたときに城を修築完成させた。」とある。また、同書には丹田縣下の社名として、西坡、阿卯、沙堆、前城が挙げられ、それぞれ現在の Tây Thành（タイタイン）、Thành Trung（タインチュン）、Kim Đôi（キムドイ）、Tiền Thành（ティエンタイン）に比定されている[4]（詳細は本紀要 西村歴史地理論文参照）。

『撫邊雑録』巻１では、「化州城は丹田縣丹田社にあり、大江が西に流れ、小江が城中を流れ、肇豊府春学都承衛門は、金茶江はその南を流れ、城の四面は水が集まって囲んでおり、城塁は百雉のごとく屹然としている。」とある。

『洪徳版図』のなかの『甲午年平南圖』では、タムザン（三江）ラグーンの近くに沙堆市（現在のキムドイに比定）、その東に占城故城（つまり化州城）が描かれている。

『大南一統誌』巻２・承天府の記述では、「香水県月瓢社（現 Nguyệt Biều（グエットビュウ）社）に占城王が居した仏誓城が伝えられ、土城の遺跡は耒城（現 Thành Lội（タイン・ロイ））と呼ばれている。広田県 城 中（タインチュン）社には城郭の遺跡300余丈残り、多くの住民がここに墓を造っている。」と記されている。

４．これまでのチャンパ時代あるいは時期不明の遺物資料について

これまで城域内では、陳朝から黎朝期の遺物（瓦、陶磁器）などが確認、採集されている。また、数は多くないものの、それ以前の時期のものと考えられる遺物も確認・採集されている。

内塁に北接する金城寺（Chùa Kim Thành（チュア キム タイン））には、ビシュヌ神像、釈迦仏、誕生仏の石像（図11）が後

図11　Kim Thanh 寺本堂内のヴィシュヌ神像（中央）、釈迦仏（左）と誕生仏（右）

図12　ホアチャウ城出土土製像

4）Văn Thanh, Phan Đăng 訳、2009年，『烏州近録』Nhà xuất bản chính trị quốc gia, Hà Nội

世に漆などを塗られ、ベトナム仏教の仏像として、本堂内の後方の部屋に安置されている。

タインチュン集落の居住者が、土製の観音菩薩（？）の胸部部分（図12）を採集している。仏教考古学を専門とするLê Thị Liên氏によれば、黎朝期の可能性があるという。

タインチュンの（Xóm（ソム）：村集落の下位単位）15のNguyễn（グエン） Quang（クアン）族の祠堂内では、“玉可攻”（図13）と漢字を刻んだ大きな塊石と、チャンパの祠堂内に用いられたと考えられる方形の基壇石（図14）が出土している。また装飾がないため時期確定が難しいが、おそらくチャンパ時代と思われる方形礎石（図15）も同敷地内で確認されている。

内塁の西南塁上に、チャンパ塔建築の基壇部、あるいは祠堂内の基壇に用いられる石製基壇の一部（図16、図17）がある。また外塁の北塁では、過去チャンパの石像を祀る祠があったと伝えられている。

図13　Nguyên Quang祠堂内の“玉可攻”の石

図14　Nguyen Quang祠堂出土の基壇石

図15　Nguyen Quang祠堂内出土礎石

図16　内塁南東塁上の基壇石

図17　内塁南東塁上の基壇石の装飾部

５．試掘を通じてもたらされた新認識

5.1　方形井戸の年代について

中部ベトナムでは、井戸枠が方形の井戸が古い時期の井戸として認識されており、それらがチャンパ時代のものであるという学術的言質も存在する。ホアチャウ城においても現タインチュン集落内において、方形井戸の存在が複数確認された。この井戸の時期を探るため、ソム１の民家敷地内（TTX１地点）にある方形井戸外枠か40cm脇で試掘（２㎡）を行った。

図18　TTX１地点の方形井戸横での試掘

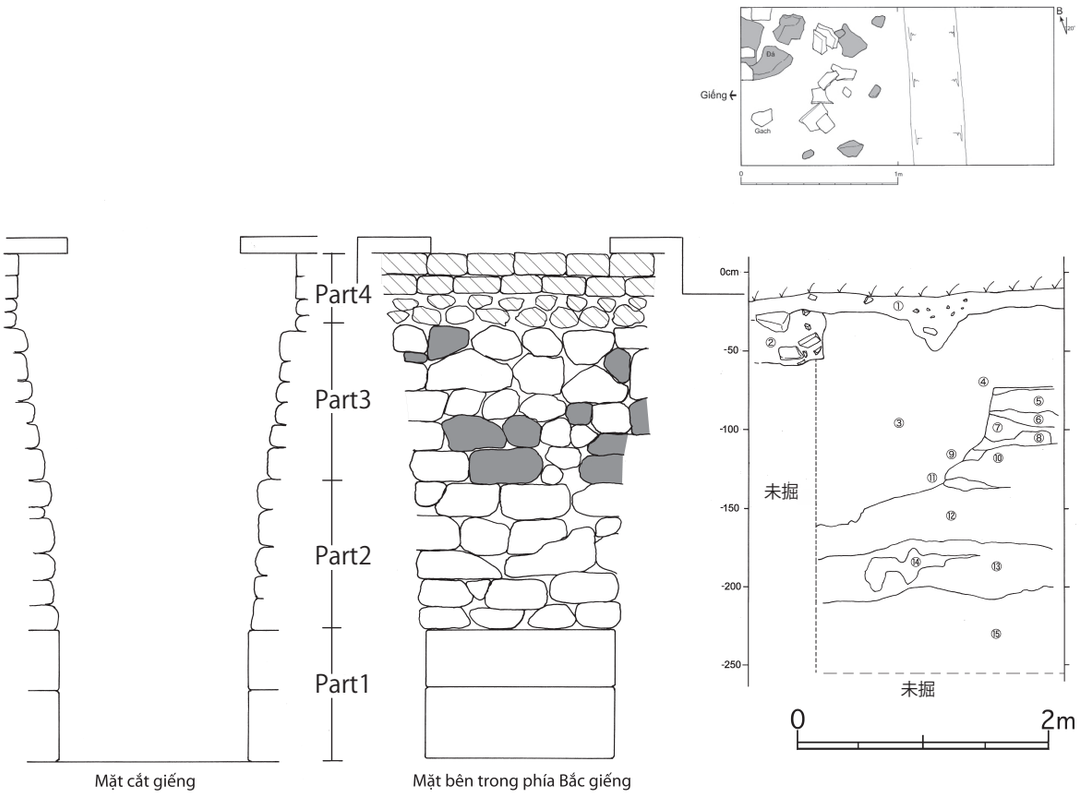

図19　TTX１地点の井戸の断面（左）とその石積み構造（中）と試掘抗の平面（右上）と断面（右）

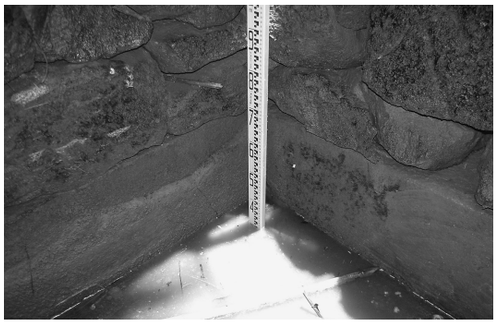

図20　TT X1地点井戸最下層部

図21　井戸内側

この井戸（図 18）は、現在も敷地所有者が利用している井戸で、コンクリートに覆われた方形の井戸枠地上部の内側では、石積みによる古井戸の構造部がきちんと残されており、それらは構造の違いにより明確な時期差を示していると考えられる（図19）。ポンプで排水を行って、井戸内に入り観察を行った。井戸枠の内法は最上部で1.7mあり、最下部で1.2mである。最下部から順に、Part 1 から Part 4 までの構造的違いを認識した。最下部 Part 1 は、厚さ38cm（上）と46cm（下）のきれいに切り出した板石を重ねている（図20）。Part 2 は、立方体に近く粗く加工した自然石塊を層状に 5 段（94cm 高）に積み上げている。Part 3 は、同じく自然石塊を層状に 5 段（95cm 高：図21）に積み上げているものだが、内法は Part 2 よりやや幅広（1.3m 幅）で、ラテライト石も混在するのが特徴である、石塊は多少の加工も行っていると思われる。Part　4 は、より小さなラテライト石塊が積み上げられている。井戸の深さはコンクリートの外枠正面から3.3m 強、周囲の地面からは、約 3 m の深さを測る。

発掘坑（図19）は、深さ 7 – 8 cm のレベル単位で、地上面より2.2m 深（31層）まで掘り下げたが、多量の湧水のためそれ以上掘り下げることは不可能であった。断面観察では、井戸枠設置のためと考えられる大きな掘り込み（③層）が確認された。また⑮層は、遺物を含む黒色の泥炭層であった。利用石材が同じであること、間層など無いことから、井戸枠の Part 1 と Part 2 は、最初に井戸を掘った時のもので、上部と下部の違いでしかないと考える。当然の井戸は掘り込んで、下層からの湧水をためる必要がある。また、当城郭遺跡の各地点でも確認され、ベトナムの低平な地域によく見られる居住地の高レベル化ゆえ、井戸枠に積み重ねを行って、結果的に井戸が深くなったと考えれば、構築材や積み重ね方が変わりつつ井戸枠が上方で大きくなっていく現象を説明しやすい。この場合、③層の掘り込みは、Part 3 の構築のために行われた堀込と考えたい。そして、⑫層上面が、最初の井戸枠（Part 1 と Part 2 ）の堀込時の旧地面と考えたい。ただし、その時の堀込は、試掘抗まで届くような大きな範囲のものではなく、試掘抗から、さらに井戸枠側に近い未掘部分に眠っていると推定する。また、⑮層は泥炭層であり、当時は池や沼のような環境で、⑬層（粘土層）を意図的に埋めることにより、生活居住面が形成され、その後⑫層を構成する地面のかさ上げが行われた時に、初めて当井戸が掘られたと考える。つまり、当地点での居住開始時から井戸があったわけではない。そして、⑮層では陳朝期の遺物も含む複数時期の遺物が確認されているが、最下層部に相当する L3–20層（発掘時のレベル）で、17–18世紀の陶磁器が複数確認されているので、当地点での居住開始は、その時期より遡らないことになる。従って、方形井戸の掘削はさらに遅いことになる。陶磁器の例数が少ないため、井戸の掘削時期を明言できないが、19世紀

図22　フォンヴィン社ミンフオンの方形井戸（下部は丸形）

まで下る陶磁器が、⑫層以下に対応するL3-1レベルからL3-20レベルに殆ど無いことを積極的に評価するなら、井戸の建設は18世紀と推定され、チャンパの時代であるという証拠は全く得られなかった。また、当地点の以外の傍証として、フオンヴィン社の旧明郷域に位置している方形井戸（図22）は、上部の井戸枠は方形であるが下部は円形構造である。これは土盛り、あるいは自然堆積により地面が嵩上げされるのに応じて井戸枠の増設をした際に、円形枠から方形枠に移行したことを示している。当井戸は近年まで使われていたことを考えるなら、上部方形枠の増設はさほど過去に遡るものではないだろう。そもそも14世紀前のチャンパ期の井戸が埋もれもせずに現地表上で認識できるという考え自体が、平野部の活発な自然堆積作用などを考慮していない無謀な議論である。

5.2　土塁の造成について

1997年に考古学院が、内塁の西南塁を土塁軸に直交するように発掘を行っているが、その土塁断面の再精査を行った（図23）。草刈り後、土塁切断面を清掃し、確認面下部で大きな自然石塊が、ほぼ同レベルで散在するのが確認された。これは土塁の基礎（根石）として混入させたものと考えられる。自然石塊が混在するレベルから、土塁頂点までは、2.7m前後あった。また、自然石塊が混在するレベルよりさらに下位にも土塁構成層が続いていると考えられる。ただし、この土塁構成層は単純な砂質土のみで構成されており、特に土色差や土質差や混入された遺物[5]などは観察されず、単純に砂質土をかなり短期間で盛り上げたものと判断される。

また2010年には、同じく西南塁の外縁で、墓を造成するときに墓坑の断面観察が行えた。わずかの厚みをもつ表土下は土塁の構成層で、斑になった土色の違いは盛り土の土種の差と認識できるが、特に版築や瓦・塼・石などを構成層に故意に入れている形跡はなかった。

こうした観察から導き出される認識は、北部ベトナムのコーロア城、ルンケー城、昇龍（タンロン）城などの土塁で観察される構造とは全く異なるというものである[6]。つまり、細かく土質や土色を変えた多層構造、塼や瓦片や礫を多量に混入させた層などが観察されないからである。

5）土塁断面精査時に、陳朝期の瓦、鉄精錬あるいは鋳造作業時の鉄滓、近現代の陶磁器片が確認されたが、これは周囲の文化層からのなだれ込みや発掘時の上層部出土品の残りと判断する。

6）西村昌也『ベトナムの考古・古代学』同成社

図23　内墨南東墨東隅近くでの旧発掘坑再精査

5.3　内墨内の平坦面について

内墨内の平坦面は現在水田として利用されている。この平坦面域での考古学的情報を得るため、城域の西域、西南墨から約30mの地点（Thành Nội　1、2地点、図24：以下TN1、2地点）と北域、東北墨から40mのところ（Khô Thượng地点：以下KTH地点）で試掘を行った。

TN1地点（1㎡：図25）は内墨の構成層の実態を探るためのもので、地山層（図26：⑦層以下）まで掘り下げを行ったが、隣接するTN2地点では、上層部で確認される陳朝期遺構の精査を主眼とし、下層部への掘り下げは行わなかった。TN1地点では、地山に到るまで1.7m程の文化層を掘り下げる必要があった。③層、④層、⑤層、⑥層は共に純質な粘質土層で、土色の違いはあるものの、遺物の混じりが非常に少ない純質に近い土層で、居住起源の層ではなく盛り土によるものと考えられる。③層と⑤層は、日射を受けて土中の鉄分が硬化して黒色化し斑状に見える現象が確認されており、③層と⑤層の上面が、露天の活動面であったことが理解できる。つまり盛り土には、第1段階の⑤層と⑥層（約60cm厚）、第2段階の④層と③層（約1m厚）の2時期あることになる。

図24　TN1・2地点の発掘地点

図25　TN1地点の断面

TN２地点では、４×４ｍの16㎡の試掘を行った。これは陳朝期遺構の精査を主眼としたものである。10cm厚程度の表土層（水田層：発掘時のLM層）をはぐと、柱穴などの建築遺構が集中する生活面（図27、図28、図29：②層上面、つまり第１文化層上面）が現れた。当生活面では、多くの土坑群が確認され、その切り合い関係なども確認できるので、遺構群は複数時期に亘る建築活動の結果と考えられる。

F20とF29は断面方形の溝状の堀込で、陳朝期の遺跡などによく確認される壁立ち建築の基礎で、建築のコーナー部と思われる。F31も、この溝状遺構と同時期の対応遺構かもしれない。また、F10、F21、F16、F28、F38、F33の土坑群も、一つの建物のプランのコーナー部を表していると考えられる。ただし、このプランは前出の溝状遺構によるプランと同時期の可能性も比定できない。その場合は前者が壁のプランで、後者が柱の配置プランを表していることになる。またF25とF17あるいはF18も、その配置方向や平面形態から、同一建築プランに属する柱設置のための基礎である可能性が高い。F25のなかには、完形に近い大型の平瓦（おそらく棟上に使う熨斗瓦）が１点真ん中に配されていた（図30）。こうした建築プラン群は全て、西南－東北方向が建築の軸方向として選ばれており、一定の企画性をもつ、比較的大きな建築であったことが理解できる。この他にも多くの柱穴や土坑が確認されているが、プラン推定につながるものは非常に少ない。当生活面、あるいはその上の面で出土している陶磁器は、14世紀のものが中心で、わずかに10-12世紀頃のものと、15世紀初頭のものが混じっている。

また、この②層（15cm厚程度の盛り土層：発掘時のＬ１、Ｌ２）を掘りあげると、もう一つの生活面（図31、図32：③層上面、つまり第２文化層）が現れた。この面ではF57を除き、確認された遺構の全てが径10cm以下の円形小土坑であり、なおかつ土坑内の土色が二重円状に異なって観察される。この小土坑群は、西南－東北方向を主軸とする長方形プラン（奥行き２ｍ程度）に納まるものが多いので、竹を柱に利用した建築の痕跡と推定され、②層上面の建築群に比べて、堅牢で大規模な建築ではなかったと推定される。また、陳朝期の瓦などが若干出土している。

両生活面の時期に関しては、それぞれの生活面あるいは、より上層での出土遺物から、③層上面の建築は陳朝期（おそらく14世紀）、②層上面の建築は陳朝期から15世紀初等（胡朝期）のものと考える。10-12世紀のチャンパ期に比定可能な遺物も若干存在するが、それはチャンパ期の生活面が、陳朝期に造成を行うときに削平されて、浮き上がった結果と考える。

KTH地点では、2.2m厚の文化層が確認された（図33）。⑩層以下の堆積が無遺物層となり、地山層と

図27　TN２地点第１層遺構確認面

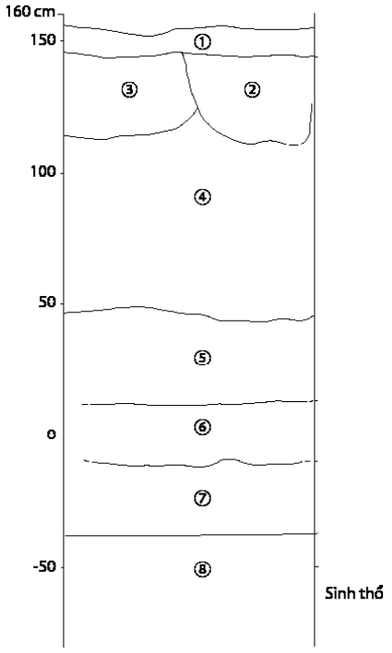

図26　Thành Nội 1 （TN 1 ）地点の断面

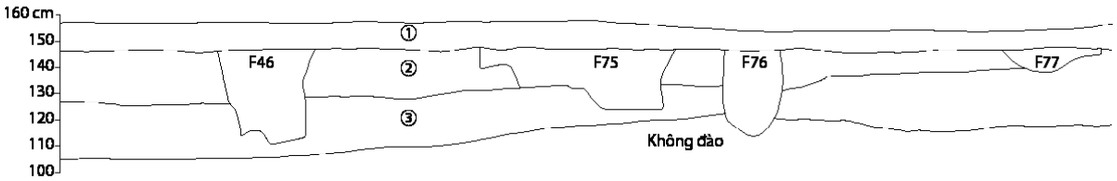

図28　Thành Nội 2 （TN 2 ）地点の断面

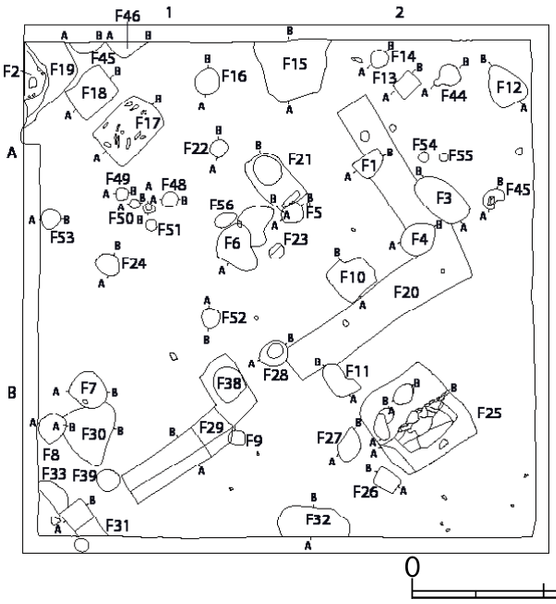

図29　TN 2 地点②層（第 1 文化層）上面

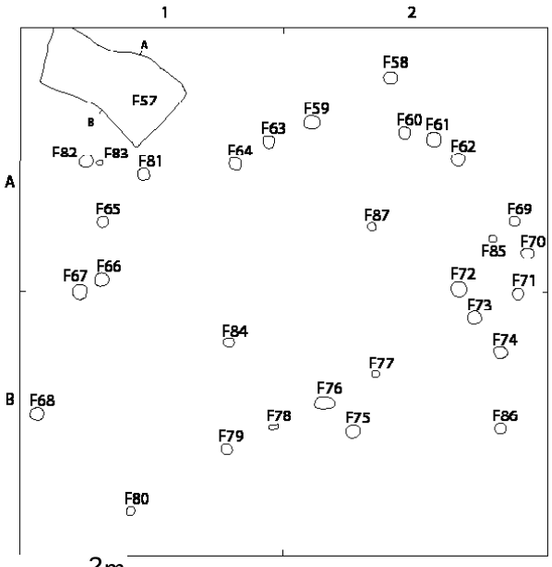

図32　TN 2 地点の③層（第 2 文化層）上面

図30　TN2地点のF25遺構

図31　TN２地点第２文化層上面確認遺構

判断される。⑪層はTN１地点の地山層⑧層と同じで、オリーヴ黒色の砂層で水を多く含むものである。⑩層は黒色砂質上層で、遺物を含まず若干の植物の根を含む。⑨層と⑧層は盛り土（約1.5m厚）で、⑧層には日射による鉄分の硬化黒色化現象が確認される。⑧層は⑦層と同質であるものの若干の土器片が含まれており、この盛り土後の生活面と考えられる。そして、⑤層、④層、③層（約60cm厚）が再び盛り土と考えられる純質に近い土層であった。⑦層からの堀込である⑥層（発掘時のＬ８レベル）では、中国の越州窯青磁やチャンパの在地高火度焼成無釉陶器などが出土しており、⑧層や⑨層の盛り土もその時期あるいはその直前と推定される。③層あるいはその直上の②層は陳朝期の瓦、陶磁器、そして若干数の15世紀初頭のベトナム陶磁が出土しているので、⑤層から③層の盛り土自体は、陳朝期のことと判断する。

この両地点の結果より、文化層の殆どは盛り土で構成されており、地山層が黒色あるいは灰黒色の砂質土層で、植物の根などを多く含むもともと標高の低い低湿な所に人工的に盛り土を行って、城郭の基盤層を造成したことが理解できる。そして、盛り土には、チャンパ時代と陳朝期の２時期あることが明らかとなった。また、TN１地点では、土器片などを含むような具体的生活面対応層が確認されなかったが、これは陳朝期の盛り土・造成時に以前の文化層が削平されたためと考える。

5.4　内塁外の南西平坦域について

内塁外から南西に拡がる平坦域（図４黄色部）は、タインチュンの集落が整然としつつも、密集する様相をみせている。民家密集域は周囲の水田などと比べ若干標高が高くなっており、その地形的特徴が城郭造成時から存在していたのかが焦点となる。

Đinh Thành Trung地点（以下ĐTTX８地点）は、層Xóm８に位置し、内塁外の南西平坦域の北東端中央に位置する。タインチュンの亭主屋の北側裏庭に位置している（図34）。２㎡の試掘を行ったが、文化層は⑤層までで、表土から1.5m深弱で無遺物層（⑥層）、さらに地山層（⑦層）に達した（図35・図36）。④層では、13-14世紀の中国陶磁やベトナム陶磁器、さらには15-17世紀の中国陶磁やベトナム陶磁が混在している。そして、文化層最下部となる⑤層（発掘レベルでは、大体L3-8からL3-12レベルに相当）では、11-12世紀の中国陶磁が若干数出土しているが、陳朝期（13-14世紀）とみられる釜形土器などもほぼ同レベルで出土しているため、同層の形成開始時期を11-12世紀まで遡らせるのは難しい。現時点では13-14世紀以降に、居住層形成が行われているが、それ以前の11-12世紀にも、発掘区周辺で居住活動

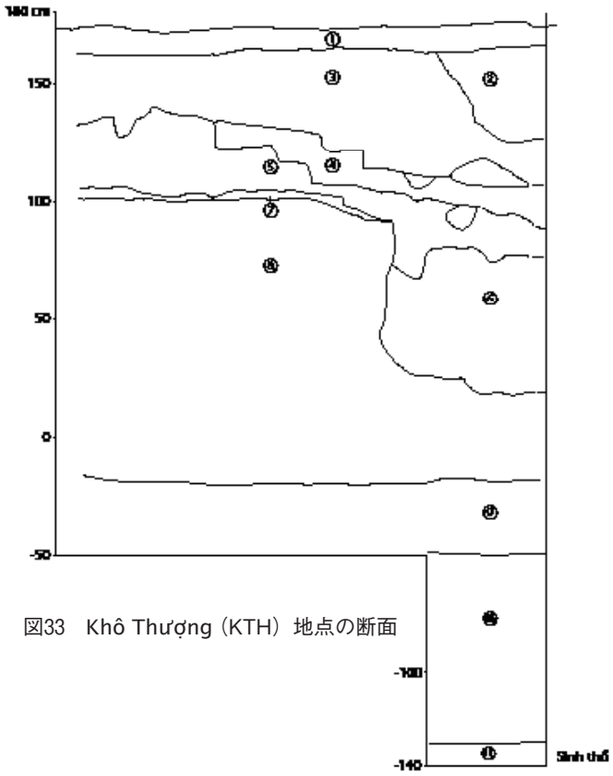

図33　Khô Thượng（KTH）地点の断面

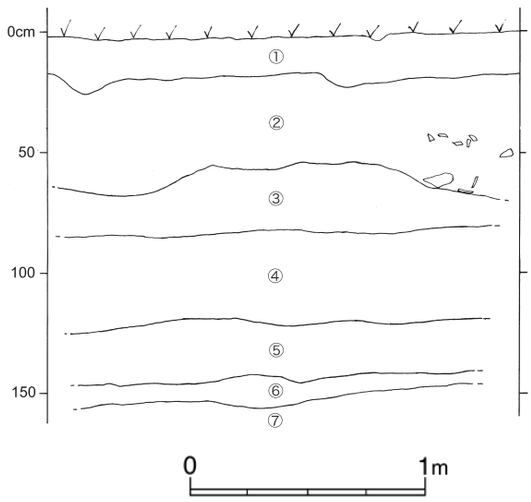

図36　Đình Thành Trung（ĐTTX 8）地点の断面

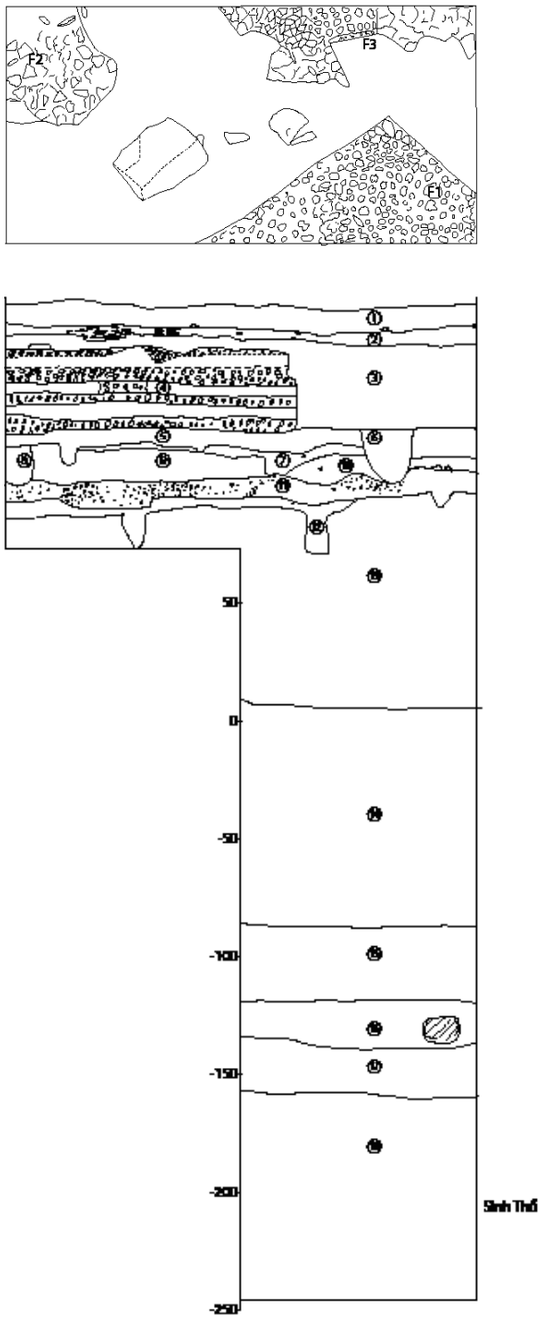

図37　Khô Trung（KTR）地点の上層遺構面
（上：各地業遺構：F 1 –F 3）と断面（下）

図34　ĐTTX８発掘地点

図35　ĐTTX8地点の断面

が存在したと考えるのが適当であろう。③層は出土陶磁器から17-18世紀以降の形成と考えてよい。前出のTTX１地点も、内塁から南西の平坦地域に所属している。ここでも、本格的居住は17-18世紀にしか遡らないこと、陳朝期の遺物は比較的多く出土していることを考え合わせれば、南西の平坦地域の造成あるいは形成は、陳朝期以後のことと推定される。もちろん、それ以前のチャンパ時代に同地域で居住が行われてはいるが、それは居住面造成を伴うような大規模なものではなかった可能性が高い。

5.5　内塁外の東北側平坦域について

内塁から東北に拡がる平坦域（図４黄色部）も、タインチュン集落の家々が整然と分布しているが、周囲より若干標高が高くなっている。先述のXóm 15に位置するNguyễn Quang族の祠堂域でチャンパ時代の遺物なども見つかっており、チャンパ時代の居住層が眠っている可能性がある。そこで、この高みを含め構造的な理解をするため、以下６地点において試掘を行った。まず、遺物整理も終わった2010年度調査地点は以下の通りである。

Khô Trung地点（以下KTR地点）は内塁の東北塁から外側へ約20mのところで、1997年の考古学院の発掘坑近くに位置している。ここでは２㎡の試掘を行った。文化層（図37）は、表面から4.2mを掘り下げたが、地山と確定できる層には到らなかった。発掘深度内での最下層である⑱層（厚さ85cm以上）は、腐食した植物質を含む泥炭層で、おそらく静水域（沼地など）に堆積したものと考えられる。そして、この上層（⑰層：25cm厚）は、⑱層と同様な性質であったものの、先史時代（おそらくサーフィン文化）の土器片を多く含んでいた。堆積土壌の性質と地表下より3.1-3.2m深前後という深さを考えるなら、当層の遺物が地上居住の直接結果とは考えにくい。おそらく近くのより高みに当時の居住域があり、そこからより下方の当層になだれ込んだか、廃棄されたものであろう。⑯層は、灰色混じりの黄色粘質土で、人工的な盛り土と判断される。この中に直径30cmを超える自然礫が混入していた。この自然礫は、内塁の旧発掘坑精査地点の下層部で確認された自然礫と同じ役目を持っていたと判断され、盛り土基底部の根石であろう。⑮、⑭、⑬層も共に、盛り土層と判断される純質な粘質土層である。⑬層は土中の鉄分が日射を浴びて、斑状に黒褐色化した現象が確認されたので、盛り土の最上層部であったと判断される。従って⑯層から⑬層にかけて、2.3m厚の盛り土が行われたことになる。⑫層から⑤層までは、居住起源の文化層と判断される。⑫層と⑦層は、火による被熱を受けていることが明らかで、赤色硬化部が確認される。さらに、その被熱を受けた層の上層、⑪層と⑤層では、被熱を受けた土片や炭化

図38　KTR 地点陳朝期地業断面

物が多く混在している。③層は、２度目の盛り土層（厚さ35cm）と判断される。

小型の河川礫や塼・瓦片を混ぜ互層上に基礎をつくった地業層３基（F１、F２、F３）が、③層の盛り土層より上で確認された。F１（④層：図38）は、小型河川礫と瓦片が混じったもので、F２は瓦片のみで作られている。⑤層から⑪層（発掘時の７から10レベル）にかけては、越州窯などの中国貿易陶磁やチャンパの在地土器が多く出土しており、より上層で、陳朝期の遺物が出現する。従って、８－９世紀頃を始まりとする第１期のチャンパ時代と陳朝期の２時期が、当地点でも確認される。

Xóm　9 地点（以下、XM９地点）は、内墨の東北墨より北東側へ約180m 離れており、内墨より北東の平坦域に位置する集落のなかで最南西集落の中に位置している。ここでは２㎡の試掘を行い表土から3.8m 深まで発掘を行った（図39）。㉔層の灰色砂層と㉓層の黒褐色砂質土層は無遺物層であり、地山層あるいは居住開始以前の形成層と判断され、㉒層の黄褐色土層より上層が盛り土や居住起源の文化層と判断され、文化層厚は３m 強にも及ぶことが判明した。㉒層と㉑層は全く遺物を含まず、㉒層のみ若干の土器が出土した。㉒層から⑳層（発掘時のL12-L15レベル）までを第１期の盛り土と判断した。⑲層から⑬層（発掘時のL11-L７レベル）までは相対的に多くの遺物を包含し、⑱層では上面で被熱を受けた現象が確認され、⑰層では焼土塊が多く含まれていた。⑬層、⑭層、⑯層でも炭化物などが混じる現象が確認され、⑲層から⑬層は居住活動が主に形成した層と判断した。⑪層から⑧層（発掘時のＬ６レベル）は、瓦片や陳朝期以降の新しい時期の遺物が出土し始めるようになるので、時期が全く異なると判断される。⑤層（発掘時のＦ１）は、柱あるいは礎石を置くために瓦片を主に集中的に埋め込んだ、地業遺構である。④層（発掘時のＬ４レベル）と③層（発掘時のＬ３レベル）は、この地業造成以降の居住層と判断される。

発掘時のＬ７からL15レベルに相当する⑳層から⑬層までは、また粗製の土器や焼成温度のあまり高くない若干の陶器片などが出土している。Ｌ６レベルに相当する⑨から⑪層では、8-11世紀の中国陶磁器片に混ざって、13-14世紀の陳朝陶磁器片など後代のもの出土しはじめる。ただし、Ｌ７レベル以下では8-9世紀の中国陶磁器片が確認されていない。以上より⑨から⑪層が、9-11世紀のチャンパ時代から陳朝にかけての移行期に形成された層と推定される。以上より当地点の文化層形成には、大まかに分けて、チャンパ時代と陳朝期から15世紀の２時期あることが判明した。さらにＬ７レベル以下で8-9世紀の中国陶磁器片が出ていないこと、Ｌ６レベルとＬ７レベル以下の在地土器には形態差がみられることに依拠すれば、チャンパ時代に限っても、8-9世紀の中国陶磁器が共伴する時期とそれ以前の、最低異なる２時期

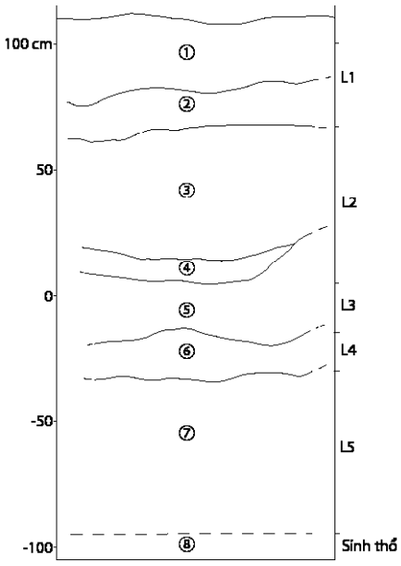

図39　Xóm 9（XM９）地点の断面

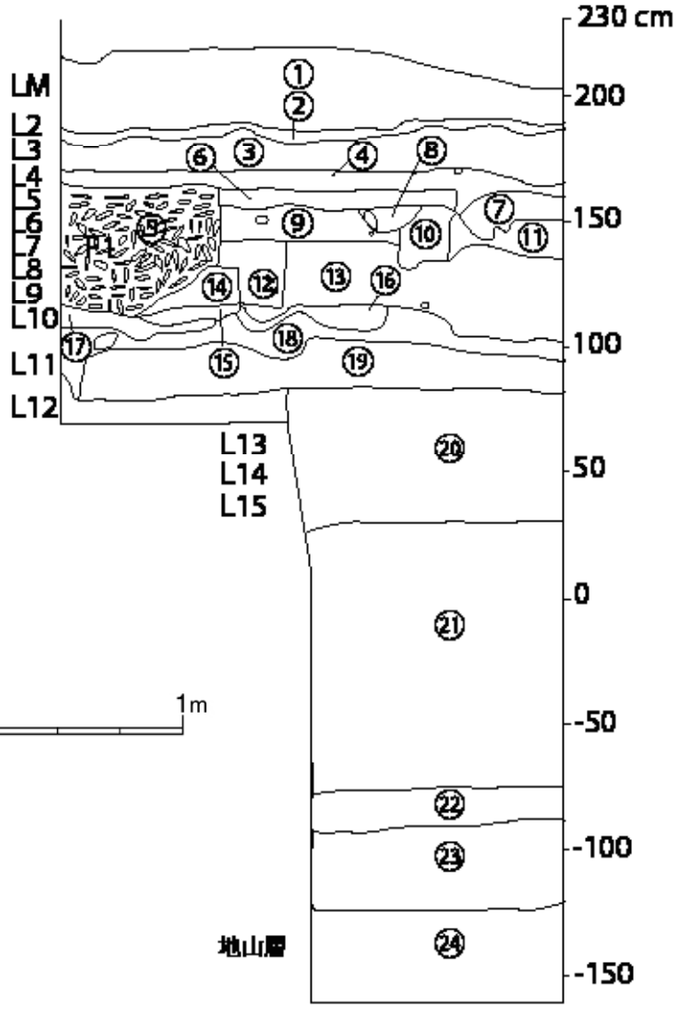

図41　Xóm 15（XM15）地点の断面

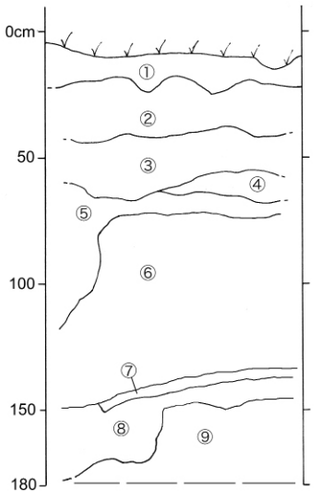

図42　Đình Kim Đôí（ĐKĐ）地点の断面

があることが判明した。

Xóm 15（XM15地点）地点は、内墨の東北墨より北東側へ約400m離れた、Nguyễn Quang族の祠堂敷地内の畑に位置する。当地点は、Kim Đoi川と、若干高みを有する集落が密集平坦域の中間に位置している。ここでは、１㎡の試掘を行い、約2.05m厚の文化層が確認された（図40）。⑧層の無遺物層は、灰色砂層で、白色砂も混じっている。その直上の⑦層が、文化層最下層となるが、当層は、水分と有機物を多く含むオリーブ黒色の粘質土で、池や沼などの水域の底に堆積する土壌である。⑥層は、純質に近い黄褐色土層で盛り土と判断される。⑦層（発掘時のＬ５レベル）出土遺物群には、陳朝期以降の遺物が含まれていたが、最も時期の新しいものは、18世紀に比定可能な中国陶磁（図41）なので、発掘坑周

囲の池沼地が盛り土により陸地化したのは18世紀以降と判断される。現祠堂敷地と川に並行して走る主道の間は池であるので、祠堂より西北側の居住地が川側に向かって拡大する過程で埋め立てられと考える。

そして、2011年９月に、Kim Thành寺地点（KMT地点）、Xóm 13地点（以下、XM13地点）、Xóm 22地点（XM22地点）、Xóm 23地点（以下XM23地点）を調査した。Kim Thành寺地点（寺の主屋南西側に接する平坦地で、内塁の南東塁の主軸を北東に延長した線より、東側に位置している。

出土遺物は未整理であるが、Kim Thành寺地点以外は、チャンパ時代の遺物が下層部から確認されており、チャンパ代の広範な城郭造成を知る根拠となりそうだ。

5.6　北塁内の平坦域について

Kim Đôi集落が北塁内の平坦な高みの区域に立地しているので、文化層の確認のため、集落内のĐình（亭）の主堂の北側裏手で１㎡の試掘を行った。文化層は、⑨層の無遺物層に到るまで約150-180cmの厚さがあった（図42）。⑤層の上部を掘り上げた段階、つまり⑥層の上面で、石製の礎石（おそらく方形）が確認された。こうした礎石は、ベトナムの通常の集落の場合、寺や亭などの集落の重要な宗教建築に用いあれる場合が多く、現在もKim Đôiの亭が位置していることを考慮するなら、この礎石は過去の亭建築の一部と推定される。⑤層は18-19世紀の陶磁器を多く含み、⑥層（発掘時のL3-1からL3-8レベル相当）には17-18世紀以前の陶磁器が多く含まれることから、この過去の亭の建築が17-18世紀まで遡る可能性が高い。また⑧層（L3-9からL3-12レベル相当）では13-14世紀から16-17世紀までの陶磁器が出土している。ただし、文化層が水平に堆積していないので、層単位の正確な時期比定は無理である。13-14世紀の陶磁器のみの出土レベルがないので、陳朝期にこの地点で分厚い居住層が形成された可能性は薄く、より後代の時期の居住活動が厚い文化層を形成したと考えたい。いずれにしても、この地点でのチャンパ時代の考古学的物証は得られなかった。

5.7　主な出土遺物について（図43）

図43-1から図43-5は、KTR地点の最下層部で出土した砂混じりのもろい胎土の先史土器である。

No.1は台付き鉢の脚部で、列点文が施されている。No.2、3、4は共に地文が縄蓆文で、No.4には条線がみられる。No.5は頭部が平坦な、サーフィン文化に特徴的な甕棺の蓋である可能性がある。図43-６から図43-12は施釉陶磁器で、12以外は全て中国陶磁器である。No.6は越州窯系の青磁碗で、No.7からNo.10は11-12世紀の製と見られる。No.8、9、12は刻花文様が施されている。No.11は長沙銅官窯の貼り花文水注の把手部分である。No.12は見込みを大きく輪状に釉剥ぎを行った、15世紀初頭の緑釉碗底部である。図43-13はベトナム白磁碗無釉陶器で、陳朝期のものと比定される小型桶である。図43-14から図43-17は胎土に砂の混じる土器であるが、先史の土器に比べ色調がより均一である。ただし、先史土器と比べて特に硬いというものではない。No.17のように縄蓆文の体部片が一定量出土している。図43-18は球形壺の口縁部と考えられ、胎質が比較的緻密なものである。No.14から18は全て、XM９地点の下層部、つまりチャンパ時代の層から出土しており、紀元1000年紀末に位置づけられるものと推定される。

図43-19と20は陳朝期の尖状瓦である。前者は削りによる調整痕が残り、後者は型起こし痕が残ってい

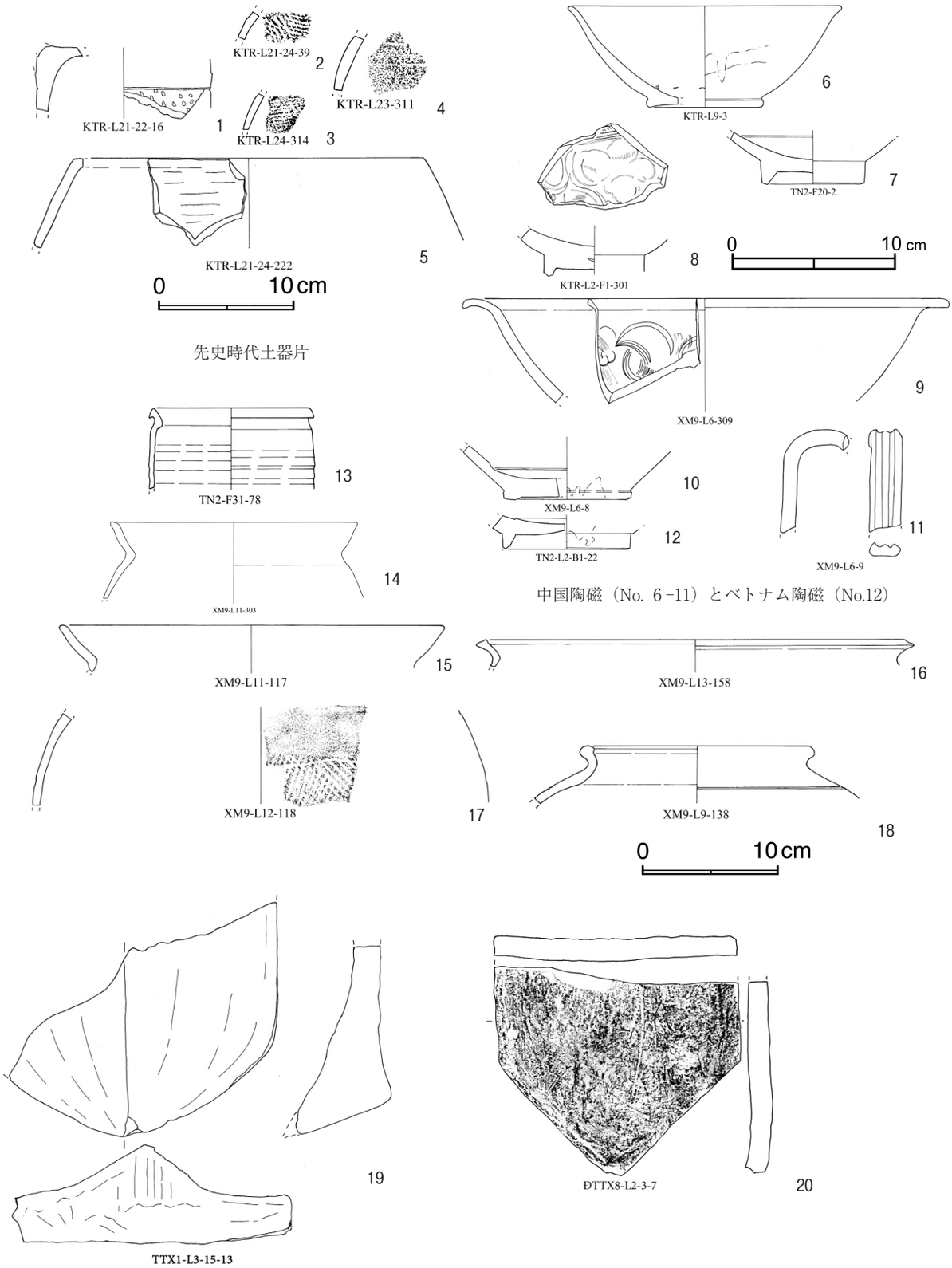

図43　出土した主な遺物（図版下端のローマ字は出土地点記号）

る。No.19は、そのサイズの大きさから大型建築の瓦葺きに用いられたと推定される。

6．まとめ

以上の城郭踏査と小規模調査の結果をまとめると、ホアチャウ城に関して以下のような認識を提出することができる。

ホアチャウ城域は、KTR 地点の結果より、サーフィン文化の時代に小規模な居住が行われていたことが判明した。しかし、KTR 地点の地山層は、泥炭層であり、褐色砂層などは浸水域の堆積土壌であり、河川起源の堆積土壌が陸地化しているような層ではない。おそらくサーフィン文化の居住地となるような陸地は当時、非常に少なく、河川や湖沼が圧倒的に卓越していた環境と考えられる。

そして、XM 9 地点での認識に基づくなら、初期貿易陶磁器（8－9 世紀頃）が出現する以前の段階において、盛り土などによりホアチャウ城の造営が行われたと考えられる。

土盛りには褐色のシルト系土壌や砂質土が主に用いられており、周囲に多く分布していたはずの湿地域の灰色形粘質土は用いられていない。これは土塁や生活面の水はけなどを意識した意図的選択であろう。当時シルト系土壌は城郭周囲にさほど多く分布していたとは考えられず、より山側に近い地域からの盛り土の運搬も想定する必要がある。内塁では、盛り土中に大型の自然礫を一定高度で混入させている。その上下の層は単純な盛り土層であり、版築工法や、北部ベトナムに多い礫、瓦、陶器片などを水抜きのため多量に混ぜた層と純質な土層を交互に積み重ねるという独特の工法などは用いられていない。また、外塁でも前述の大型自然礫などか各所で露頭していることを確認できるので、内塁と外塁は同じ工法で、おそらく同時期に造成されたものと考えてよい。

当時、盛り土により造営されたプランは以下のような区域と推定される。

内塁とその内域生活面：TN 1 ・ 2 地点、KTH 地点でチャンパ時代の盛り土が確認され、内塁と共にその内域も丁寧に造成されたことが判明した。ただし、出土遺物から内域の活発な居住利用は考えにくい。

内塁に北接する中央平坦域：KTR 地点、XM 9 地点、XM13地点、XM22地点などでは、下層部で、チャンパ時代の盛り土層や遺物が確認されているので、図44に示すような広大な範囲の高みが、盛り土により造成されたことになる。各地点の試掘では、内塁内に比べて遺物が多いので居住域として機能した可能性が高い。内塁に南接する平坦域に関しては、チャンパ時代の造成は否定的である。

外塁と北塁：コーナー部などを中心に二重、三重に土塁が造営されていることも大きな構造的特徴である。今のところ同様の構造を持つ例は、ベトナムにおいて寡聞にして知らない。

ただし、長方形プランを基本形とする内塁（あるいは内城）と外塁をもつ城郭に定義を拡げるなら、紀元 2 世紀に造営されたチャーキウ城、造営時期は不明であるが 2－3 世紀の遺物が表採されているビンディン省の An（アン） Thanh（タイン） 城などが類似例として挙げることができる。その一方で、『水経注・36巻』・温水条に記載されている區粟城と考えられるフエ市西郊外の Lời（ロイ） 城など、紀元1000年紀半ばの城郭プランとの形態差も見ることができる。この問題に関しては、もう少し測量や試掘などの実地調査を重ねる必要がある。

そして、第 1 期のホアチャウ城は、初期貿易陶磁器の出現する時代から11-12世紀頃まで活発に利用さ

れている。

陳朝期から15世紀初頭（おそらく胡朝期）になると、再び城郭内外で造成が頻繁に行われており、盛り土による整地と建築活動が行われている。

内塁を中心とする城郭中心域利用は15世紀までのようで、現集落下での居住活動が活発になるのは17–18世紀以降のことと判断される。

謝辞

本調査は文部科学省科学研究費スタートアップ（平成20–21年度）、基盤研究Ｂ（平成22–24年度）の研究結果の一部である。